

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可  
平成二十一年二月一日発行（毎月一回一日発行）  
第八十七巻第二号

# 文藝春秋

総力取材 **秋篠宮が天皇になる日**

独占掲載 筑紫哲也「がん日記」/橋下知事・堺屋太一「官と戦え」 二月特別号





特別企画

# わが人生最良の瞬間

## 輝ける30人の幸福論

歓びのとき、苦難の日々、出会いと別れが今の私をつくった

プーチンに教えた柔の心

山下泰裕

(東海大学教授)



私は自分の人生をいくつかの段階に分けて考えている。第一段階は柔道の現役選手としての人生。第二段階は指

導者。そして現在は、柔道を通しての相互理解や人間教育に携わっている段階だ。現役選手としての最高の瞬間を挙げろと言われたら、ロサンゼルス五輪の金メダル獲得になるが、いまの段階で言えば、ロシアのプーチン首相（前大統領）との出会いになるだろう。

初めて言葉を交わしたのは、二〇〇〇年九月に、プーチン氏が大統領として来日したときだった。プーチン氏は十三歳から柔道に打ち込み、学生時代には地元サンクトペテルブルクの大会で優勝したこともあるほどの腕前だ。そこで森喜朗首相（当時）と講道館を訪問することになり、全日本柔道連盟の嘉納行光会長と私がお迎えした。柔道着に着替えたプーチン氏はこんなスピーチをした。

「この場所に立つと、わが家に帰ってきたように感じる。私だけではなく全ての柔道家にとって、講道館は第二の故郷なのだ。そして忘れてはいけないのが、柔道が世界に広まるということだ。日本の文化が広まるということだ」

この時期、私は全日本柔道男子監督として世界中を飛び回っていたが、日本を理解している人たちが、世界中のごく一部にとどまっていることを残念に思っていた。そこにプーチン氏のスピーチである。私は柔道の力に自信を深めた。

二〇〇三年に小泉純一郎首相（当時）がサンクトペテルブルク建都三百年記念祭に参加したときも、柔道の力が発揮された。首脳会談に難色を示すロシア側に対して、日本の外務省はこんな提案をした。プーチン氏が学生時代に練習していた道場へ私が指導に行き、それを両首脳が視察、その後に会談を行うというものだ。私との関係を利用しろとアドバイスしたのは故橋本龍太郎元首相である。出発直前にロシア側から了解の返事がきたが、このとき他に単独会見ができた国はアメリカぐらいだったという。

プーチン氏が二〇〇五年に来日したときは日本酒を酌み交わした。このころ日本とロシアは領土問題を巡って対

立が深まっていた。そこで私は、柔道の創始者、嘉納治五郎先生直筆の「自他共栄」の掛け軸をプーチン氏に贈呈し、こう言葉を添えた。

「『自他共栄』とは柔道の基本理念で自分と他人が共に栄えていこうというものです。日本とロシアが互いに協力して発展していくことを願って贈ります」

このプレゼントに大喜びしたプーチン氏は急遽、食事を設けてくれた。他のロシア人がシャンパンやワインを飲む中、プーチン氏は私と二人で熱燗

いた磨いた  
すらすら  
いいいちこです。



飲酒は20歳を過ぎてから。お酒はおいしく適量を。妊娠中・授乳期の飲酒には気をつけましょう。

醸造元 三和酒類株式会社 大分県宇佐市山本・虚空蔵寺下  
TEL 0978-3311-433  
http://www.itsuwari.co.jp

を口に運んだものだ。

ロシアへ招待されたのはその直後である。「子どもたちに柔道を指導する機会を設けたいので協力してくれないか」というので、シドニー五輪金メダリストの井上康生君を連れてサンクトペテルブルクを訪問した。昨年十月に「ウラジミール・プーチンと柔道を学ぼう」という柔道の解説DVDがロシアで発売され、日本でも話題になったが、それはこの時に撮影されたものだ。ロシアでプーチン氏と試合をしたのかと尋ねられたこともあるが、それはない。私が投げられるのもわざとらしいし、まさか投げるわけにもいくまい。撮影後に六、七人で食事会が開かれたが、このときプーチン氏の隣にいたのはメドベージェフ現ロシア大統領である。

こうしたプーチン氏との交流を目的の当たりとして、外務省や財界は次第に柔道の力を認めるようになった。私は二〇〇六年、柔道を通じた国際交流を促進するためNPO法人「柔道教育ソ

リダリティー」を設立したが、トヨタ自動車取締役相談役の奥田碩氏が顧問に就任してくれた。

このNPOの活動で私が目指しているのは日本の「和の心」を世界に知ってもらうことだ。プーチン氏が「柔道が世界に広まるということは日本の文化が広まるということだ」と言っているように、柔道を通じて日本の文化、精神を知って欲しいのだ。

いまグローバリズムの名のもとに世界中で格差が広がっており、足もとの日本でさえ「自己責任」「勝ち組」といった言葉が世間に氾濫している。だが勝者になれば何をしてもいいというわけではない。他者を思いやる「和の心」が社会には必要だ。勝者がすべてを得るようなギスギスした競争社会で、人は心の安らぎを得られるだろうか。

いまこそ世界には日本の「和の心」が必要だ——私は以前からこのような思いを抱いていた。それが具体的な行動につながるようになったのはプーチ

ン氏との交流を通じて、柔道は国境を越えることが実感できたからだ。プーチン氏と会ったことが、私の人生の第三段階を大きく変えたといっても過言ではない。